当院のMMG・US同時併用検診による1年間の総合判定検診成績の検討

札幌乳腺外科クリニック

　　米地貴美子、中川弘美、藤原真由子、五日市律子、渡部愛梨、

　　　　　　　　　　　　　　　　渡部芳樹、本間敏男、岡崎　稔、岡崎　亮

【目的】ＭＭＧ検診単独では、高濃度乳房の感度が低いためＵＳを上乗せしたＵＳ併用検診が勧められている。当院では開院当初より、乳腺専門クリニックの施設検診のメリットとしてUSを同時併用して検診を行ってきた。その総合判定結果を検討した。

【対象・方法】対象は2019年4月から2020年3月までの1年間に、当院にて検診を行った自覚症状のない札幌市の対策型MMG検診対象者3,109名(繰り返し受診率96.4％)。検診方法としては、MMG撮影後、MMG読影下にUS検査、最後に視触診と結果説明を行い、当日可能な範囲で細胞診等の二次検査も行っている。

【結果】1年間の検診成績は、受診者3,109名中、要精検者78名(要精検率2.5％)発見乳癌数18例(発見率0.58%)陽性反応敵中度23.1％であった。40歳代の発見乳癌数が8例(発見率0.8％)と最も多いが、要精検率も4.4％と最も高かった(表1)。

受診者の年齢割合は40歳代と50歳代で67％を占め、高濃度乳房は40歳代60％、50歳代41％であった(図1)。

ＭＭＧ単独検診では要精査となるＭＭＧカテゴリー3以上の症例は132例あったが、ＵＳ検査と比較読影により8割以上が精査不要となり、要精検となった症例は132例中24例(18.2％)であった。逆に、ＭＭＧではカテゴリー1・2で、ＵＳの精査対象となるＵＳカテゴリー3以上で要精査判定となった症例は64例中38例(59.4%)あり、やはりUSのみの拾い上げ症例は要精査判定となる症例が多い結果となっていた。しかし、MMGカテゴリー1の症例に6例のＵＳ発見乳癌が含まれていた(表2・表3)。

【まとめ】ＵＳ併用検診を行うことにより、要精検率2.5％、乳癌発見率0.58％と好成績であった。一般にＵＳ併用検診を行うことにより要精検率が上昇すると言われているが、繰り返し受診による比較読影と装置の精度管理、検者のスキルアップにより、要精検率はある程度までは抑えることが出来ると思われる。今後も併用検診の精度向上を目指したいと考える。